

の書類を、何通も作成したと聞いた記憶がある。

引揚げ後、父は民間会社や私立高校・大学の事務部門などに勤めて生活の資を得ていたが、再び積極的に教職に就こうとはしなかった。心中、戦前教育に対する様々な思いがあったのではないかと推察されるが、直接父にその点について聞いてみたことはない。

二人の娘を亡くしたが、四人の息子がそれぞれに所帯を持ち、孫にも恵まれ、謡曲や読書、たまには小旅行を楽しむなど、父母の晩年はつつましいものであった。

父は、昭和五十三年二月五日、横浜市の病院で八十歳の生涯を閉じた。母もまたその後を追うように昭和五十四年八月六日、奇しくも広島原爆記念日に、逗子市の長兄宅で、同じく八十四歳の生涯を閉じた。

## ある開拓団員父娘の生きざま

埼玉県 矢部 時子

はじめに

私は、幼いときに開拓団の家族の一員として、満州に移住した。以来、人生の半分以上を中国で過ごしてしまっただが、それこそ波瀾万丈の半生であった。永住帰国をしてからも苦労は絶えなかった。悔いても仕方ないことではあるが、この悲劇は私たちまでで終わりたい。

父の生い立ちから苦勞の生涯や、私が残留日本人として帰国した前後の悲しい思い出などを書き残して、二度とこんな悲惨なことが起きないように、また、これからの子供たちに絶対にあのような苦しみをさせることのない世の中となることを願うものである。

もとより幼かった私には、終戦後までのことはあまり記憶に無く、よく分からないので、はっきりしたこ

とを話したり書いたりすることは到底できないので、矢部家の事情や父の生前のことなどは、叔父・叔母をはじめ親戚の者から聞いていたことを思い出しながら書いたが、書いているうちに、ちくはぐなところも出てきた。そのあたりは許していただいて、この拙文が、戦争の絶対にならない、平和な世界の存立に少しでも役に立てば、これ以上の喜びはなく、私の長い長い苦勞の旅も無駄にはならなかったと思うものだ。

#### 一 渡満の動機

私の生家は、典型的な東北の農村地帯にあった。

父、正至は長男であったが、長ずるに及んで志を立て、海軍を志願し海兵団に入団した。海軍退官後は家業を継ぐこととなったが、その当時は昭和大恐慌の初期で、日本のみでなく世界中に不景気風が吹きまくっていた。毎日毎日、父親と一緒に私も農作業に従事していたが、その激しい労働の割には生活はあまり楽にならなかつた。

父は、こんなことをしては一家みんな倒れてしまふ、なんとか立ち直らなければと毎日考えるように

なつた。海軍の軍人として長く生活をしていたため、世界の港と大きな都市を見ていたので広い知識を持っており、この貧農の生活はあまりにも惨めであり、欲求不満の塊であつたのだろう。同じ軍人出身である祖父の厳しい叱咤激励への反発もあつて、農業をあきらめて東京に出て働く決心をした。

東京では、自動車の運転手や工員などをして働いていた。家に残つた家族は相変わらず大変な苦勞の毎日であつた。特に母は農作業と家事と子育てで、夜も休む暇もないくらいに働いていた。

この貧困から抜け出すには、満州に開拓移民として移住する以外に方法はないと考えるようになった。

当時、白方村（福島県の岩瀬地方）からも国策の呼びかけに応じて、一家を挙げて開拓団に入り満州に移る者もたくさんいた。その人たちから話を聞くことにより、父も満州に行くことに気持ち傾いてきた。そんな時に、昭和十年代から満蒙開拓の先駆者として北満に行っていた立花開氏が、一時帰ってきていろいろと現地の話をして、満州に行くことを奨励した。それ

に応じて、父の三番目の弟の勤治一家も満州に行くこととなった。

父も四囲の状況を知ると、母に相談をして私たちが供と共に移住する決心をした。祖父たちは残ることとなった。

昭和十七年の秋、一家六人が長い歳月を過ごした故郷に別れを告げた。私が、再びこの地に戻るのに五十年近くもかかろうなどは、夢想だにできなかったことだ。希望は夢と膨らんでいた。貧乏から抜けられるというだけで、一家の気持ちは明るかった。

## 二 一家の開拓団での生活

入植したところは、満蒙開拓第九次福島集団筆架山開拓団であった。

そこは、三江省富錦県にあったが、私たちが聞いていた前評判では、派手というか、活気があるというか、いずれにせよ生活のしやすいところであるということだったが、実際にその場に入ってみると、団員相互においても家族間においても、何となく冷たい感じのする開拓団だった。明るい気持ちで期待感でいっぱい

だったのが、まず夢破れたという感じだった。一番頼りにしていた立花家は、もう退団していなかった。

叔父の勤治一家は、第四部落に入っていた。話によると、筆架山開拓団は団長が少し年をとりすぎていたので、副団長が実権を握っていて、各部落の運営は副団長主導で行われており、資金の運用も粗雑で、人心は荒廃しているということだった。第四部落までで約八十戸が所在しているが、第五部落を建設する意欲が薄れていて、私たちを受け入れる準備は、何もなされていないということだった。

父は、海軍の下士官出身であったので、その力量、手腕を買われて老団長に信頼されて、第五部落長を命ぜられた。

警護のために旧式の銃や弾を渡されたが、性能が悪く、いつ暴発するかもしれないというものだった。割り当てられた住み家も、まだ中途半端な建築であり、あちらこちら手直しをしながら住んでいた。生活に一番必要な飲料用の井戸も、まだ掘ってなかった。もちろん日常の食糧や、開拓に必要な農機具も整わぬまま

に月日だけが過ぎていった。

そのうちに、部落民の中に負傷者や、原因不明の病気による患者が続発するようになってきた。私の兄も病気になり、十分な看護も受けられないままに、間もなく死んでしまった。

父も母も随分とショックだったようだ。部落の人々もみんな健康状態が低下する一方だった。母トミ子も、父を励ます気力もなくなり、毎日涙するばかりだった。父は、入植当初の気力充実した様子がだんだんと薄れてきて、言葉も少なくなってきた。

第五部落は、十余戸で構成していたが、それぞれの住居も雑然と建てられており、隣同士の連携もあまりよくなかった。山に近かったので、鳥や獣による被害も多く出た。家族を大勢抱えていた年輩の人々は、前途に対しての希望がだんだんと失われてきたし、団結力も弱くなってきた。

部落の立地条件としては、水田は近くにあり土地はよく肥えており、山林にも近い、ということは燃料にする木材も採出容易であった。生活するには有利な条

件がそろっていたのに、衣・食・住に事足りる生活が一日としてなかったと言っても過言ではない状況だった。今になって思えば、当時の入植者の気持ちを推察するに、胸が詰まってくるようだ。

そんな生活をしている間にも、年月だけはどんどんと過ぎていった。戦争もだんだんと追い詰められてはきたが、それでもまだ日本と比べれば平和だった。郷里からの手紙にも「そちらはいいねえ」というような言葉が書いてあった。

### 三 終戦前後の混乱状態

昭和二十年の五月になると、筆架山開拓団にも戦争の波が押し寄せてきた。五十歳以下の男性には召集令状が来て、有無を言わずに動員されてしまった。父も召集されてしまい、だれが第五部落長になったかも分からなかった。

八月八日、突如としてソ連軍が北滿の国境地帯を怒濤の如き勢いでもって突破し、南下してきた。

団本部からも避難命令が出されたが、第五部落は本部から一番遠く離れていたもので、すべての情報や指令

が、後手後手になっていた。はっきりとした部落長もいないので、部落内の指示もはっきりしなかったようだ。人心は動揺し、最悪の結果をもたらしていた。こんなときに父がいたらなあと家族で話し合ったものだった。部落の指揮をとるものがないと、指示がまちまちとなり混乱に輪をかけた。

そのうちに、ようやく部落民の避難態勢ができて、佳木斯方面に向かって出発した。そのころには、団本部をはじめ他の部落の人々は、先を争うように筆架山から去っていった。佳木斯の市街が猛火に包まれているのを望見しながら、佳木斯に向かって歩き続けた。

ようやくのことで、私たち第五部落の避難民一行は、最初の目的地であった佳木斯駅に到着した。しかし時既に遅く、最後の避難列車はとっくに出発していた。

その後、列車の来る予定はないとのことで、歩くことになった。

女、子供が多いので、最初は線路に沿って歩き南下したが、松花江の鉄橋がソ連兵によって爆破されてし

まい、鉄橋を渡ることができなくなった。致し方なく松花江を船で渡ろうとしたが、渡し船はすべてソ連兵の手によって沈められてしまった。江には多数の小船が、帆柱が空に向かって突き出した恰好で沈んでいたのが、今でも印象に残っている。こうなったら、今度は江に沿って、道なき道をさまよいながら歩くほかなかった。

私たちも、家族を励まし合い、助け合いながら一生懸命に歩いた。ここでみんなとはぐれてしまったら、野垂れ死にするほかはない。そのうちに、先に歩いていた人が、「向こうに見える丘の上に、匪賊がいるらしい、危険だから行かない方がよさそうだ!」と言ってきた。どうしようもなく、土手に腰をおろして休んでいたら、別の避難民のグループの長らしい人が、「心配はいらないよ。力を合わせて頑張りましょう!」と励ましてくれたので、そのグループの人たちと一緒に、再び歩き始めた。

当初は、依蘭方面に向かって歩いていたが、山を越えたり、山を下ったり、小さな道に入り込んだりして

いるうちに、方向が全然分からなくなってしまった。

あるときは、大きな道に出たが、そこを歩いているうちに満人部落にぶつかってしまった。今、私たちが一番悪いのは満人であった。老人、女、子供ばかりの集団で歩いているので、何をされるか分からないので、うっかり部落に行つて声をかけることは禁物である。みんなは、「子供を泣かすな、早くここを抜け出るのだ」と急がせて歩いた。若い女たちは、荷物を背負い年寄りの手を引いていた。母親たちは、子供を背負うか手を引くか、両手に荷物を抱えて歩いている。その姿は哀れというか、悲惨というか、何とも形容のできない姿であった。

どこに行けばよいのか、あてもない旅ほどつらく情けないものはなかった。

食べる物も満足に食べていない日が続き、周囲の人もだんだんとやせ細ってきた。目ばかりギョロギョロとしていたし、頭の毛は抜け落ちて、明らかに栄養失調の症状を示していた。

山から道へ、道から山へ、出たり入ったりの旅とな

った。もうどこに行くという目標もなくなってきた。

山に入ると、野性のブドウの葉や木の実をとって食べたり、満人の畑に入つてトウモロコシやジャガイモをとり、生のまま食べたりした。満人に見つかると、棒や鍬などで追いかけて、逃げるのに大変だった。走ろうとしても、気ばかりが焦って足がついて行かず、思うように走れなかった。逃げる途中でつまずいて倒れたりして捕まってしまう女、子供もいた。背中に赤ん坊を背負い、小さな子供の手を引きながら畑の中を逃げるのだから、捕まるのは当たり前だが、分かっているにも食べなければ飢えてしまうので致し方なかった。しかし、それを助けることはできなかった。命あつての物種とばかりに逃げまどった。捕まった人たちがどうなったか知るよしもなかった。

そんな状態の日々を過ごしながら、相変わらずあてもなく歩き続けていた。依蘭方向に向かっていることは間違いないようだったが、現在地がよく分からなかった。

ある日、満人部落の近くを通りかかったら、こん棒

や、鎌や、鍬を持った大勢の満人に急に襲われた。理由はよく分からないが、今までになく殺気立っていた。私たち避難民は驚いて、蜘蛛の子を散らすようにして四方八方に逃げ惑った。これが、母トミ子と妹たちとの今生の別れであった。もう二度と会うことはできなかった。しばらくの間その近くをさまよい歩いたが、母や妹たちはもとより、一緒にここまで来た人たちにも会えなかった。このときから私は、一残留孤児となってしまったのだ。それからの記憶は、薄れてしまつて今でもあまり思い出せない。

ある中国人の家族に拾われて、その家族の一員として育てられたことだけは事実である。

#### 四 父、正至の後半生

父は、召集されて佳木斯の部隊に入隊したが、間もなく終戦になり、ソ連軍の捕虜となった。筆架山開拓団から一緒に召集された何人かの人たちと同じ集団になって、クラスノヤルスクに連れて行かれた。それからの強制抑留者としての日常生活は、多くの体験者の証言にあるとおりであった。ただ父は当時のことはあ

まり話したがらなかったそう。

どんな理由があったのかよくは分からないが、多くの捕虜集団の中であつて、比較的早い時期に、「ダモイ列車」に乗せられてナホトカに行った。そこでしばらく抑留されて大した労働もなく過ごしていた。今日は復員船に乗れるのか、明日は確実に乗船か？と復員船に乗ることはかりを楽しみにしていた。ある日、突然に出発の指示があり、一同大いに喜んだのも束の間、逆送されてウオロシローフの山中に連れて来られた。そこではお定まりの重労働の毎日であつた。この収容所の扱いは特にひどく、筆舌に尽くせないものがあったとのことだ。

父は元来、体力は頑健であり、そのうえ海軍の現役兵として日夜鍛錬を重ねていたので、あのシベリアの過酷な重労働にも耐え抜き、居残りをさせられたようだった。

ダモイが随分と遅れて、昭和二十四年七月に郷里の白方村によりやく帰った。

戦後の実家は、父の五番目の弟七郎が家督を継いで

いたので、いくら長男であってもそこにいることはできなかつた。だが、筆架山で生き別れとなつた妻子の生死の状況がはつきりとかかめなかつたので、実家を離れるとなるとこの情報が余計入らなくなるのではないかとのためらいがあつた。それでも、実家には長くいるわけにはいかないので、決心をして、白方の地から離れることとした。

私たち家族よりも前に開拓団として渡満していた弟の勘治や、従兄弟の立花兄弟も無事に引き揚げて来ていた。彼ら引揚者が多く入植して開拓に従事していた安達太良山の麓の開拓村に入ることになった。

父は一人寂しく悄然とした気持ちで開拓を始めた。長い間シベリアに抑留されていたにしては、健康状態はまあまあよかつたが、精神状態は最悪であると周囲の人に語っていた。

そのうちに別の未開地に集団移住することになった。そこには、村立の中学校や役場も造成されるということであり、立地条件からいっても有利であるので、せっかく開拓に手をつけたばかりであつたが、譲

り渡して最初からやり直す決意であつた。

そこは水利も良く、開墾すれば米作りもできることだつたが、実際には石ころが多くて大変に骨を折つたそうだ。

一からの開拓であるので、すべての面で大変だつたが、馬賊が襲ってくるわけでもなく、獣害に遭うこともなく、寒さもそんなに厳しくなく、筆架山開拓団時代から考えれば、気持ちのうえからは楽だつた。

努力のいかいもあつて、月日が経つに従つて開拓地もどうか形を成してきた。しかし、その間においても、片時も忘れられない妻子の様子は何としても分かんかつた。父も、周囲の人々にも、だんだんとあきらめの気持ちが生じてきた。独り暮らしも大変なので、知人の世話により、子連れの戦争未亡人と再婚し、そのうえにその老母までも引き取つた。

いっぺんに四人の家族となつて、家の中はにぎわいをみせ、どうにか落ち着いた生活をするようになった。そのうちに子供が次々と生まれて、一家は十人の大世帯となつた。正に律儀者の子だくさんそのもので



あった。

苦勞、奮闘の成果は水田一町歩となり、これから少しゆっくりして楽をしようと言うようになった。しかし、積年の心身両面からの苦勞は、さすがに応えてきたようで、病床に就くことが多くなり、入退院を繰り返すようになった。せっかくの丹精した水田も、療養費を得るために少しずつ人手に渡すようになり、借金だけが残った。

そして数年後、大樹が朽ちる如くに波瀾万丈だった一生を終えて、この世を去った。息を引き取るまで、満州で別れたままの妻子のことを口にしていたのとことだ。満州開拓が大きな夢であったのに、すべてを失ってしまった一人の男の心の中は、いかばかりだったことであろうか。今になってしまうと察することもできない。

##### 五 私、時子の悲哀

私は、中国人の家族の一員として育てられたが、決して心の休まる日々ではなかった。多くの残留日本人孤児と同じように、迫害されることはしょっちゅうで

あった。

「日本鬼子<sup>リッペンクイズ</sup>、日本鬼子」とののしられることは日常茶飯事であった。しかし、私はここから出されたら生きる道はないと思ひ、悔しいとき、悲しいとき、父や母の顔を思い出して歯を食いしばって過ごした。家のことはどんなにつらいことでも、いやな顔はせずに働いた。

こんな環境の中で小さいときから育った私は、他人に負けてはいられないという気持ちが一気に強くなり、何事にも意地を張って過ごしていたので、それがだんだんと性格にも表れるようになり、気の強い女となっていくた。自分でもどうしようもなく、家でも嫌われるようになってきた。

しかし、私は日本人であり、矢部時子であるということとは、両親の顔と共に一日も忘れなかった。

小さいときの性格のゆがみからか、食べ物も満足に食べられなかったからか、または萎縮した気持ちで過ごしていたためか、よく分からないが、矢部の家系に似ずに、私は体が小さく華奢であった。

二十歳前に、養父母に勧められて結婚した。夫は思ったよりも優しく親切だった。次々と子供を産み、男五人、女二人の子供に恵まれた。幸いにみんな体も丈夫で、すくすくと育った。七人の子供に囲まれて、貧しいながらも平和な毎日を過ごしていた。

夫が兵隊に行つて武勲を立てたので、「名譽の家」ということになり、生活上の優遇を受けていた。それにして、七人の子供を育てるには生活は大変で、それこそがむしろに働いた。周囲からは、欲張り女と言われたこともあった。

そのうちに文化大革命が起きたが、私は『毛語録』などを一生懸命に学習し、当時の思想を忠実に受け入れていた。残留日本人であっても、あまり迫害を受けることはなく過ぎた。

夫は亡くなったが、相変わらず阿修羅の如き気持ちを持って毎日の生活を営んでいた。私の、だれにも負けたくない気持ち、他人からいろいろと言われるのが嫌いな性分、かたくなな心の持ち方が、根性となってどうにか苦しい生活を乗り越えたのだろう。七人の子

供は、この母の気持ちをよく分かつてくれ、助けてくれたのが、唯一の心の慰めであった。

日中平和友好条約が締結され、待望していた残留日本人の一時帰国が実現した。

尚志県に、残留日本人として中国人と結婚し、家庭を持つていた、叔母のアキと会うことができた。叔母は、一時帰国で日本に帰り、再度中国に戻ってきたのである。残留日本人仲間の情報から、父の一番末の妹であることが分かり、私は会えるのを楽しみにして、わざわざ尚志県まで会いに行つたが、結果は感動というよりも複雑な違和感を持ったというのが正直な気持ちだった。

あまりにも違った環境、あまりにも長い年月の経過で、お互いの気持ちが冷めていたのかもしれない。故郷、福島の話も聞いても、私には記憶がなく他人ごととしか耳に入らなかつた。ただ、日本が目覚ましく発展していることや、矢部家の様子などは興味深く印象に残った。

父の家は、叔父の七郎が継いでいることが分かり、

父は実家にも入ることができずに、安達太良山麓の開拓村に入り再婚して、苦勞の末に異母弟妹七人を残して死亡したことも知った。何か心の支えが一つ切れたような気がした。

私は、自分の気持ちの中に、「父は矢部家の当主ではないか。その当主が死んだら、その後継者は長子である私で、当然に矢部家の資産を継ぐ権利がある」という考えが、むらむらと起きてきた。

だれにも負けることが嫌いだという性格から、こんな思いが浮かんできたのだろう。そして、その思いを叔母に話したら、叔母は顔色を変えて反対した。それからは、私はその気持ちを静めることができなくなった。私も一時帰国をしようと決心した。

叔母が、「時子は残留日本人として生きている。しかし、矢部家の財産をねらっている。だから一時帰国を受け入れない方がよい」という内容の手紙を故郷に出したことが私に伝わってきた。一時帰国は、身元引受人がいないと許可にならないのだ。

そんなことがあって、私は一時帰国ができなくなっ

た。

それから三年が過ぎ、私の知人もほとんど一時帰国をした。中にはそのまま永住帰国となり、戻ってこない人も増えてきた。周囲の日本人がだんだんと少なくなり、寂しくなって、何とかして帰りたいという気持ちがわき起こってきた。

私は、一時帰国の希望を日本大使館に申し出たが、そのことが福島県の引揚者団体の滝田連合会長の耳に入ったらしい。「帰国したい希望のある者を、止める権利がだれにあるのか!」ということになり、従兄弟の立花さんらが音頭を取って、身元引受人になってもらい、一時帰国の手はずが整った。立花さんから「帰国の意思があるのか、帰りたいならば俺が身元引受人になる。しかし、岩瀬でなく俺のいる大玉村に来るのだ!」とのことだった。私は、もうどこでもいいから早く日本の土を踏みたかった。

しかし、物事はなかなかうまくいかないものだ。私は、母や、妹たちと一緒に満州で引揚げ時に死んだことになっており、戸籍が抹消されていた。戸籍がなけ

れば帰国できるはずがない。そこで福島県で裁判にかけて「生存申立」をしてもらった。裁判では、実家の人々や立花さんなど関係者に対する取り調べがあり、それに約一年を要した。おかげさまで無事に復権した。改めて帰国手続きをして、更に二年を要した。帰国の意思を申し出てから約三年余が経って、やっと一時帰国が現実のものとなった。

## 六 故国、日本に永住して

昭和五十三年九月十三日午後三時、母国日本に帰ってきた。取材報道陣が大勢カメラを構えて私たちを写していた。この歓迎にはびっくりして、これから先が案じられた。私は、男の子供ばかり五人を一緒に連れてきたが、子供たちも驚いて大はしゃぎをしていた。

取材陣から、今日のこの帰国までの経緯についていろいろ聞かれたが、日本語は忘れていたので、あまりよく意思を伝えることができなかった。

後で聞いた話では、成田空港では空港反対の過激派によるデモがあつて、その取材に大勢の報道関係者が集まっていたところに、私の帰国歓迎の旗を見て取材

に寄ってきたとのことだった。岩瀬村では、残留日本人の帰国第一号ということで、県庁からの指示で役場からも係官が成田に迎えに来たとのことだった。

成田から福島に向かった。子供たちは、日本全部が東京のように繁盛していて、にぎやかであるものと思っていたようだった。故郷に近づくにつれてだんだんと田園風景となり、がっかりした様子だった。

須賀川駅に着くと、役場からも多数の人が出迎えてくれて、いろいろと質問を浴びせられたが、半分も返事ができなかった。

矢部家に到着、仏壇の前で合掌した。みんなは大声で泣き出した。これで日本に帰ってきたという実感が、心の内からわいてきた。

翌朝、田圃の真ん中にある、父が精魂を傾けて建てた屋敷の周囲を歩いてみた。中国とあまり変わらない山々に囲まれている様子を見て、子供たちは落胆していた。

私は、早速に矢部家の本家に行きたいと申し出たが、まず、菩提寺への墓参りが先だと言われた。それ

はそうだと思り返して、ご先祖さまにご挨拶をした。そこに役場の人が来て、定住を希望するならば至急に手続きをするようにと言われて役場に行った。指紋採取で長男が拒否する騒ぎがあった。中国共産党員であったので、役場でもいろいろとこずったようだ。その後、村内の挨拶回りをしたので、いい加減に疲れてしまった。

翌日は「敬老の日」のため、役場での行事は休みだったので、立花さんの家に挨拶に行ったが、山の中の小屋の様な家に子供はびっくりしていた。私は、同じく一時帰国をしている立花さんの長女の悦子さんに会うことができて、日本に帰って初めて中国語でのおしゃべりができて、楽しく過ごした。

定住手続きが済み、住民登録申請も提出した。これで一時帰国から永住帰国に変わり、待ち望んでいた、日本人としての日本での生活が公にできることとなった。定住世帯準備金の支給を受け、さらに県、村からの見舞金など現金で約六十万円、その他に米や、衣類や、家具など、生活に最低必要な品々をもらった。一

躍金持ちになったような気持ちになった。

気持ちが豊かになると、中国に残してきた娘たちのことが心配になってきた。このお金の一部を送金したいと申し出たが、駄目だと断られた。生活資金だから当たり前かとも思うが、私はどうしても送金したいと叫んだ。自分の性格の地が出てきたのだった。言葉がはつきり通じないので、周囲の人は啞然としていた。言葉が通じないことは大変なことだと後悔したものだ。った。

そんなこんなでいろいろあったが、一応定住はできたが、五人の子供を抱えていると、田舎では生活はできなかった。

残留日本人として中国で親しく付き合っていて、私と前後して日本に帰ってきた人が、いろいろと様子を知らせてくれた。ここにいたならば、思うような生活はできないと考えた。子供は派手な都会にあこがれを持ち、どうしてもここから出たいと言うので、友人を頼って埼玉県に移った。それから、また大変な生活が続いた……。

今は、中国に残してきた娘二人も、家族を連れて私のもとに来て、男の子もそれぞれ中国から嫁を迎えて何とか生活をしている。一族三十人を数えるようになった。昔の生活を思えば夢のような平和な毎日である。私の気性も穏やかになり、好好婆となった。

父が生きていれば、また違った半生となったかもしれないが、戦争の悲哀をともに受けた家族のそれぞれの運命、だれを恨むわけにもいかないだろう。こんなことは、もう二度とないだろうし、あつてはならないことだ。

筆架山開拓団第五部落の人々の冥福を静かに祈りながら、一開拓民の父と子が、あの戦争によってどんな運命をたどったかを残したく、書いた次第である。

## 花模様の着物と赤い足袋の悲劇

埼玉県 大島 一 恵

一 はじめに

私は、明治四十三年一月に生まれました。随分年をとったので、昔のことはだんだんと記憶が薄れて忘れつつありますが、あの終戦のときから引き揚げるまでの苦難は、忘れろと言われても忘れられるものではありません。

あんなに悲しい事、恐ろしい事、情けない事は、二度と経験したくはないし、他の人々にも経験させてはならないことです。その願いを込めて、思い出すままに書き綴りました。

二 避難命令を受けて

昭和二十年八月十四日、突然のソ連軍の侵攻により、ここ晨明開拓団にも避難命令がきました。

その年の七月になって、開拓団の若い団員にも次々